

研究成果の紹介

2014年に多発したトビイロウンカの発生経過

2014年は2013年を上回るトビイロウンカの多発生がみられた。苗箱施用剤の残効が失われる7月に広範囲に飛来があったことが主な原因と考えられる。本田防除においては、薬剤が株元に届くように施用することが重要である。

内容

予察灯へのトビイロウンカの飛来は、淡路地区で6月下旬、北部地区で7月中旬にみられた。また、本田では7月中旬に中・東播磨及び丹波地域で長翅型成虫が確認されたことから、7月上～中旬を中心に広い範囲に飛来があったと考えられる。

8月中旬には増殖タイプである短翅型成虫（飛来後次世代）が、同下旬からは第2世代幼虫の発生がみられ始めた。8月下旬の発生圃場率は、北部29%、東部85%、西部100%、南部83%で、県平均は77%と過去10年間で最も高く、県病虫害防除所は8月29日に発生予察注意報を発表して防除を促した。

しかし、9月上旬には発生圃場率が県平均95%（平年比31倍）に達し、払い落とし虫数5.9頭/株（平年比15倍）、要防除密度（5頭/株）を超えた圃場が15%と、依然として多発生状態が続いていたため、9月12日に発生予察警報が発表され

防除の徹底が図られた。坪枯れの発生は9月下旬ごろから始まり、10月以降広くみられるようになった（写真）。中・晩生品種の多い県西部では特に多く、発生圃場率は約20%であった。

坪枯れは増殖した第3世代虫によって引き起こされる（図）。7月の飛来は、中・晩生品種において苗箱処理剤の残効が失われる時期であるとともに、第3世代虫が収穫前に発生するので被害を受けやすい。

普及上の注意事項

トビイロウンカの短翅型成虫と幼虫は株元に棲息している。本田防除では薬剤が株元に届くように施用しないと十分な効果が得られない。収穫期間近は使用薬剤が限られるので、定期的な調査に基づく適切な防除を実施する。

八瀬 順也（病虫害部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

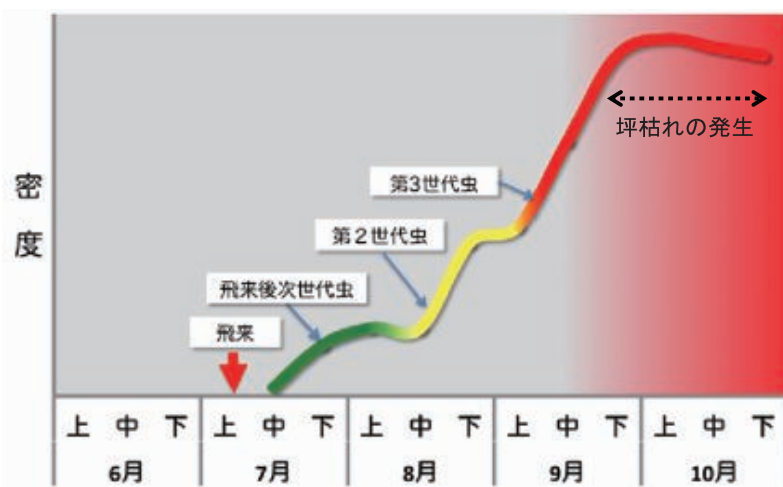


図 2014年のトビイロウンカ発生推移（模式図）



写真 坪枯れ圃場と加害中のトビイロウンカ（枠内）（2014年10月17日）